

---

# 大将と猫娘

雪乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大将と猫娘

### 【Nコード】

N3365T

### 【作者名】

雪乃

### 【あらすじ】

ある日突然、異世界ヴィシライーフア帝国に来てしまった黒羽瑠羽と、ヴィシライーフア帝国軍人ジルベール・デュイ・フォートリエが織り成す恋愛ファンタジー。別名、受難話とも。

不定期更新中。

## つえるかむ？異世界

ほら、異世界トリップしました。って話よくあるじゃない？ファンタジー小説とかでさ。

ごくごく平凡な女の子が、美形の男に拾われて恋に落ちて最終的にはめでたく結婚して幸せに暮らしました。って。

でも、それはあくまでも非現実世界のお話であって、現実的にあり得ないと思ってました。

ええ、15分前までは。

遡ること15分前。

私こと、黒羽瑠羽くろはね るう、19歳。県内の私立大学に通う大学生。名字と名前の両方に『羽』があるのが小さい頃からの不満だ。

フルネームで並んでると、ちょっと不恰好じゃない？名付け親の我が両親を恨むこと早13年。

まあ、それはさておき私ね大学生な訳でその日、講義は午後からしか入ってなくてゆっくりしながら家を出て、大学に向かったの。そうしてたら、途中友人に会って一緒に行くことにした訳よ。

「瑠羽、おはよう。ってもうお昼だけだね」

「おはよう、咲里さき」

「珍しいね。昼からの講義？」

「そつ。二限の講義休講になったの」

「へえー」

他愛ない話をしながら歩いてただけど、話していると周り見えなくならない？私は、気を付けてるんだけど時々なるの。  
で、それがまさしく今だった。

「ちよつと、瑠羽！！足元、マンホールの蓋開いてる！！」

「ひよわあああつ！！」

切羽詰まった声は、私と咲里の両方。  
見ると、誰かの悪戯かはたまた工事したあとの閉め忘れかは判断出来ないが、穴がポツカリ開いていた。  
このまま落ちたら、どうなるかわわなくても察しはつくよね。

と言うわけで、身体を振り何とか穴を飛び越えた先に無事に着地した。

自分を褒めてあげたいくらい。って思ってたら、小さな黒猫が私の足元を横断してたの。

「ニヤアッ」

「つつ！？ギヤアアツ…猫ー！！退いてーっ」

この時の私、片足が浮いてました。慌てて、踏みつけないよう後ろに下がった結果、どうなるか分かるよねー。  
後ろは、マンホールの蓋が開いた穴があるわけでした…

「溜羽っ!!」

咲里の先ほどよりも、ひどく慌てた声を聞きながら私は、「ああ、もう終わったな。避けられるものでもないし」と、諦め瞳を閉ざした。

落下の衝撃も、マンホール下の下水道の臭さも訪れない事から、そつと瞳を開いたらね？

見知らぬ広大な森に一人ぽつんと、草の上に座り込んでた。

咲里や黒猫の姿がないことから、私一人この場所に居るらしい。

「どこ何処？」

マンホールの下は、森に繋がってました。何てあるわけないよね。夢か？

出来るならば、それを一番に希望したい。

頬をつねってみただけ、痛さしか感じないと言っことは…

「……現実!？」

見知らぬ世界に突如として来てしまう。

脳裏を異世界トリップの単語がぐるぐるとループする。

いやいや、まだ異世界と決まった訳じゃない。

帰るには、どうしたら良いんだろう?と首を捻ってたらガサリと音がして、草を掻き分けながら金髪碧眼の男が姿を現し、私を見るなり警戒心を露にしながら敵に対峙した時ような視線を向けてくる。

不審人物ってのは分かってるけどね、何も突然殺気を向けてくることとはないじゃない。

か弱い女の子なんですけど。日本在住の一般市民ですよー。

魔法使いの家は豪邸でした。

「?& \$ !」

「えっと、何語ですか？英語じゃないですよね？（何言ってるか分からない…）」

金髪男は身長180cmは、越えてるだろう。座ってる私とでは、かなり身長差がある上に整った顔は美形に数えられるはずだ。日に焼けてない素肌は職業柄ゆえか。

身を包むのは、ファンタジーの世界でありそうな魔法使いが着てるだろう黒いローブ。

目の前に、夢じゃなければ魔法使いが居る。

ますます異世界トリップが、有力な線になりつつあるな。確定かもしれないが。

ローブの裾が風を受けて靡くさまを見てみると、男がした行動で効果音がつきそうなまでにビシッと固まってしまっ。

何処から剣を出したのか良く見えなかつたけど魔法ですか？

魔法使いなら魔法使いらしく杖でしょ!?

何故に剣？

剣の方が殺傷力あるから。ってやつ？ピンチじゃん!!

だって剣よ？武器なのよ。その気になれば、人ひとり殺すことさえ簡単に可能なそれを突き付けられてた。

現代人の私は、そんなのと無縁な生活を送ってたのだから怖くて声でないのも仕方ないと思う。

固まった私を男は一瞥し、改めて服装と最初にあげた言葉に疑問を  
持ったのだろう。

警戒心はそのままに、剣を鞘におさめ何かを呟いた（呪文を唱えたらしく剣は消えた）後、ガシツと腕を掴み立たせると慣れた足取りで森を歩き、木に括りつけてた馬の手綱をほどくと、私を乗せ馬の腹を蹴った。

当然、馬は走り出すけど……私乗馬経験皆無なんです。高い怖い速い。

そんな言葉しか浮かばない中、漸く止まった馬から降ろされると、眼前に広大な敷地内に聳え立つ屋敷。

一体、屋敷の維持費どれくらいかかるのかと言わんばかりに広い。敷地も屋敷も。豪邸と言っても良い。

東京ドーム何個分ですか？

私とは一生無縁の世界にあるべきもの。

おそらく金髪男の家だろう。

もの凄く金持ちなんだ。魔法使いつて儲かる職業だっけ？

私の中で魔法使いの家のイメージがガラガラ音をたてて崩れ落ちて行くのを感じた。

暗い森の奥にある古びた一軒家の一室で鍋をかき回すイメージしかなかったよ。偏見だったのね。少ししてから屋敷の使用人らしき人が出てきて一言二言交わすと、馬の手綱を受けとりそのまま馬を引き連れて、何処かに行ってしまった。

私はまた腕を引かれたまま、屋敷へと連れ込まれ、そのまま成り行きで有り難いことに面倒でも見てくれるのかな。と金髪男の身ぶり手振りのジェスチャーで理解して感謝したのだけど、違ったらしい。

三日後、屋敷の一室に閉じ込められたまま暇をもて余していた所、例の金髪男が部屋に入ってきて、眼前になみなみと揺れる紫色の液体が入ったコップを差し出した。

飲めと言う事らしいのは分かるけど、人体に影響ありませんか？飲んで大丈夫ですか？と（言葉通じませんが）問いたくなるくらい妖しげな色と、時折ポコポコ泡を発する謎の液体。

「飲みたくないんですが」

「\*。x T @ & ¥ %」

相変わらず理解不能な言語を発しながら、男は私にグイッとコップを近づける。

匂いは……悪くない。どちらかと言えば、甘い。

チラリと男とコップを見比べる。

飲まなければ、諦めてくれなさそうだ。

どうとでもなれ。と投げやりにコップを受け取りグイッと流し込むように液体を体内に取り込む。

「っなに!？」

途端に身体が、高熱を出したときみたいに熱くなり、心臓がドクドクと早鐘を打つのを聞きながら、胸を押さえて私は意識を手放した。

「  
£@  
」

男が嬉々とした表情で、倒れた私を抱き上げ部屋を出たなんて知らずに。

売られたみたいです。

次に目覚めた時、私は見知らぬ一室にいた。バルコニーに通じる窓から見える外の景色は、記憶にないことから魔法使いの屋敷ではないみたいです。

何畳あるんですか？と言わんばかりの一室。私の家の敷地面積よりは狭いと思いたい。

天井には見たこともない装飾のシャンデリアが存在しており、あれ物凄く高いんだろーと思う。

私は広い部屋のソファーに凭れるように寝てたらしく起き上がると、金髪男が机を挟んで反対側のソファーに偉そうに足を組みながらいる男と何事かを話している。

言葉は、理解できてない。

普通、トリップしたら言葉通じないとき何かしらのアイテムや魔法とかで　私の場合なら、先ほどの妖しげな液体で言葉が理解出来るようになってるはずよね？

なのに分からないって、なら何？あの液体。

うーん、うーん唸っていると視界の端を銀色の何かが掠めた。何だろう？と思いついていくと、尻尾があった。猫の。

それは己の身体に……ちょうどお尻の辺りから生えていた。まさかと思い、頭にソロリと手を伸ばせば、ピクリとして温かい何かに触れる。

……この状況から行くと、猫耳か？

言葉にならぬ声を発した私を、何者かが抱き上げてソファアに座り己の膝の上に座らせた。

金髪男は、ソファアに座ったままニコニコしている。

と言うことは、偉そうにふんぞり返ってたもう一人の男か。

恐る恐る見上げると、男の紫色をしたアメジストの瞳とぶつかる。日本人を彷彿とさせる黒髪に、親近感が出て来そう。と考えてたらまたもや視界の端を掠めた銀色の物体。

今度はなんだと若干あきれながら見ると、髪の色が黒髪から綺麗な銀髪に変わってました。

言つときますが、私の両親は生粋の日本人で過去ご先祖様に異国の血が混じった人はいません。

考えられるのは、金髪男？私の身体に何してくれるの。言っても言葉通じません。口惜しや！！

そうしてる間にも、黒髪男はテーブルの上に紙を無造作に放る。

テーブルの上を占拠する大量の紙。紙に印刷されてる文字は、やはりだが分からないけど……なんとなくそれが紙幣ではないかと予測をつける。

だって金髪男が、嬉しそうにそれを受け取ってるんだもの。

ただの紙を喜ぶ人なんていないだろうし。ならば、金銭的なものしかない。消去法でいけば、それが妥当。

黒羽瑠羽、19歳。

異世界に来て三日で、どうやら私は売られたみたいです。

猫耳尻尾娘としてか？有り得ないーっ。

色々と初めてを体験しました。

その後、金髪男は帰り私は黒髪男の家のメイドだろう人達に引き渡され、身体を洗われました。

抵抗は、意味をなさなかった。意外とメイドさんは力があるらしいことを学びました。知っても何の役にも立たないけどね。

羞恥に真っ赤になってる間に、てきぱきと身綺麗にされ気がつけば黒髪男の寝室だろう部屋にペイッと押し込められ、拳げ句鍵をかけられて逃げ場を失った非常に危険な状況である。

黒髪男は、私をベッドに引き摺りこむようにして押し倒し、見上げると視線があい、フツと柔らかなものになった気がする。

男女二人、ベッド。と来たたらやることって限られてくるよね。

……貞操のピンチなんです。助けは期待できそうにありません。

「ジルベール」

「へ？」

この世界に来て、初めて理解できる音となって耳に届くが何を指す言葉なのか。

「@ xジルベール」

「……………？」

再び何かを言ってくるが、ジルベールと言う単語？しか分からない。

「？」

……もしかしたら、名前だろうか。彼の。すると私は名前を聞かれでもしてるのかもしれない。

「瑠羽……黒羽瑠羽です」

「クロバルウ？」

「……瑠羽です」

「……ルウ？ルウ！」

うん、たぶんわかってくれたんだと思う。

発音も、何処と無く外国人がするような独特のそれ。世界広しと言えど、漢字使う国なんて限定されるし。ルウで妥協するしかなさそうだ。

「それでいいです。ジルベールさん」

「　　ジルベール \$」

何だろう？言葉通じないって本当に不便だね。

「ジルベールさん？仰ってること分からないんですけど」

「N  
「

「だから分からないって」

「  
「

「  
「

「  
「

拳げ句、ジルベール（だろっ名前黒髪男）は、深い深い溜め息をつく。

溜め息をつきたいのは、私もだ！！

その後、色々と試行錯誤した拳げ句、おずおずと呼び捨てで呼んでみる。

「……ジルベール」

「  
&  
ルウ」

……あつてたのだろうか。  
ギユウツと抱きしめられ、それから顔中にキスの雨が大量に降ってきた。

名前を知ることができたのは良しとしよう。一歩前進できたからね。だけど、ここはベッドの上な訳でして。

だんだんと部屋の空気がね？甘ったるいものへと変わって来たのよ。

まてまてまて！！

このまま行けば今日初めて会った男と、男女の関係に発展してしまっただろう。嫌でも。

それに大きな声では言えないが、私彼氏いたには居たんだけど身体の関係にまでは発展したことがない。つまり処女な訳です。初めてって大切じゃない？

シルバーに捧げても良いのか？早まるな、瑠羽。よく考える。

「……………ルウ？」

「……………」

「……………？」

「……………」

……うん、逃げよう。

後悔することになってからじゃ、遅い。

即実行した私は、ジルベールの下から抜け出し窓がある方向へ走っていく。入り口のドアは鍵がかけられてるしね。

窓に手をかけた瞬間、

「ひよわわっ！！」

と、身体を駆け抜ける何とも言いがたい快感に身動きが出来ず固まってしまう。

涙目で振り向くと、背後にジルベールの手が尻尾を撫で上げおまけとばかりに耳をカプリと甘噛みした。

「ひゃああんっ……」

身もだえる私を抱き上げたジルベールは、ベッドに戻ると覆い被さってくる。

困いのように頭の近くの両側に置かれた腕は、逃がさないと意図表示のよう。

降ってくるキスに、私はどうすることも出来ずにファーストキスを体験するはめに。

日本で付き合ってた我が彼氏は、俗に言うヘタレと言うやつでキスすらしてくれなかった。ファーストキス奪われちゃったじゃんかーヘタレ明樹あきのバカア！！

理不尽な八つ当たりとも言えるそれを、ここにいない彼氏に向ける

私。

「ルウっ！！ ㍻」

「っっ、なにっ！？」

顎を掴まれ、強制的にジルベールと向き合い視線がバツチリ交わる形にされてしまう。

何でか凄くご立腹な様子。

私のせい？私が何かした？

「っっっ！！んんっー！？」

噛み付き貪るかのようなキスに、すべて奪い尽くされるような錯覚さえ起きる。

角度を変え、幾度となく交わすキスに慣れない私はあっという間に蕩けて身体の力が抜けていく。

「はあっ、んっ……」

間近で見た、ディープキスの証のような唾液の糸の生々しさに現実を突きつけられたかのよう。

夢ではなく現実で起こってることだよ、と。

「あっ…?」

「ルウツ…!」

性急な手つきで服をまさぐりながら、脱がされていく。  
迷いのないそれは、慣れた人のそれ。

…… って初めてな私が、明らかに不利じゃん!!

同意を得てから、普通するんじゃない?

愛のある行為じゃない!! 無理やり!! 強姦!?

犯罪の臭いがするんですが、異世界で強姦されるって犯罪に当たり  
ますか?

そもそも、異世界の何処の国にいるか分からないけど国民ましてや  
この世界の人間じゃない私に対して、相手の人は罪シルベールに問われます?

じたばた暴れる私をシルベールが困ったような表情で宥めてくる。

その間も、片方の妖しげな手つきは変わりませんけども。

流されそうで怖いです。

言葉が通じました。

翌朝、小鳥の囁く声と室内に入り込む太陽の日射し、他人の温もりを感じ目を覚ます。

当然ながら私はジルベールの腕の中で眠っていた。

寝てるジルベールを見ていたら、視線を感じたのか起きた。

アメジストの瞳が、私をとらえる。

「おはよう、ルウ」

「……………おはよう」

「なんだ、不機嫌だな。拗ねてるのか？それとも低血圧か？」

「……………」

言葉が通じないままが良かったかもしれない。

昨日、結局一線を越え抱かれた私。途中、私から求めたような気がするから、一方的な行為とは言いがたい。

犯罪ではないよね。合意の上での情事えっちになるんだろうな！。

でね、不思議な事に終わって微睡んでた辺りからジルベールの言葉が分かるようになったわけ。

勿論、ジルベールも私の話す言葉がわかる。

えっちしたから、言葉が通じるようになったなんて思いたくもないが、無関係とも言えないし。超複雑だわ。

「風呂行くか？さっぱりするぞ」

「……行く。って何で貴方まで来るのよ！！」

ベッドから降りて、部屋についている浴室に行こうとしたらシルベールまで入ってきた。

「恥ずかしいのか？昨日隅々まで見たことだ。今更だろ」

「それとこれとは別よ。出て行ってよ」

「断る」

「私もお断りよ！」

「遠慮するな。綺麗に洗ってやろう」

「いやああああっ……！」

その日、朝の清々しい空気のなかフォートリエ邸に絶叫が駆け巡ったが、次第に快楽に咽び鳴く声に変化したのだった。

私が一夜を共にした黒髪男は、名をジルベール・デュイ・フォートリエと言う。

身長188cmで歳は今年で、130歳。

はい、この時点でおかしい点に気付かない？

どうみても20代後半〜30代前半の外見な彼。

聞き間違えてもなく、この世界では普通なんだって。

ジルベールよりも上の、500歳以上生きている人もウヨウヨいるらしい。

さすが異世界。寿命半端なく長い。

ちなみにですね、私みたいな違う世界から来た人がこの世界の人と結婚したら寿命も同じになるらしいですよ。

私の場合、ジルベールとだね。

あ、これジルベールが嬉しそうに（みえた）表情で教えてくれた。抱かれはしたけど、結婚は無理なので苦笑いで返事は避けたが。

好きな相手としたいに決まってる。だから、ようは保留ね。

ジルベールはこの国……何て言ってたかな（忘れちゃった）国の大将の位にある軍人。

なんて人を買われたんだろう。

そして、元居た世界に帰れるかなあ？

帰りたいんですけども、無理っぽい気がしてならない。

っ！

「膝に乗せるな!！」

「構わん。重くない。軽いくらいだ」

「違っつー!!」

何故か私を膝に乗せながら、食事をする130歳の大将ジルベール・デュイ・フォートリエ。

「ほら、口を開ける」

「一人で食べれる」

「俺がしたいんだ。言うことを聞け」

……なんだ、この俺様思考は。

もう少し優しい人のところに買われたかった。

ガクツと頂垂れる私の耳に、ジルベールの笑いを噛み殺した声がする。

「俺は優しいだろうが」

……と。

どちら辺が優しい？

私には、分かり兼ねるよ。

こうして、私はジルベールのもとで受難と言う名の異世界生活が幕を開けたのです。

衣食住の面倒は、きっちり見てくれるのはありがたいけど何故必要以上にスキンシップをしてくるの。  
日本人な私には、耐えられません。

日本にお住まいの両親、我が親友たちよ。

私はそちらの世界では、どういう立場にありますか？家出扱い？

あの時、異世界トリップする瞬間まで一緒にいた咲里は、何らかの事件に巻き込まれたと言っていてそうです。

ああ見えて、サスペンスドラマ好きだし、妙に正義感あるし。  
警察に殴り込みしてなければ良いのだけど。

どれにしても行方不明なのは、かわりないでしょうね。

誰でも良いから、一刻も早くそちらに帰る方法を教えて欲しい。  
連絡する手段すら分からないのにどうやって助けるの。って言った  
ら終わりだけど。

それくらい切迫した状況下に置かれてるのよ。

だからね、早くしないと。

「やつ……んああっ!!」

「ルウ、気持ちいいのか？」

嬉々として私を抱くジルベールの手練手管に落ち、孕んでしまいま  
すっ!!

銀髪緑眼ですが日本人です。

ジルベールの所でお世話になり始めて早二月と十三日<sup>ふたつき</sup>。

夜の戯れを除けば、実に快適な不自由ない暮らしをさせてもらってます。

メイドさん達は優しいし、食事は文句のつけようがないくらい美味しい。

あえて他に不満をあげるとすれば、今の状況くらいだ。

私の身体を無理やり猫化させた件の魔法使い男。

名をノエル・ユテラ・アルベール、御歳367歳。

ジルベールより年上にも関わらず、外見は20代前半にしか見えな  
いのは何故？

どんな若作りしてるんですか？それとも老化防止の魔法でもあるの  
？あるなら是非、私にもかけて下さい。

引きこもりのイメージが強いのが、魔法使いや魔女なのだがこのノ  
エルという男は違うらしく屋敷にいないことの方が多いらしい。

それが仕事なのか私的な用事でなのかは分からないが。

で、ノエルがこの屋敷を訪れた際にもとに戻して欲しいと頼んだら、  
何て言ったと思う？

「猫は不満？じゃあ、兎にする？それとも栗鼠が良い？」

って言ったのよ？

ぷちんつと堪忍袋の緒が切れかけたわよ。

え？どうなったかって？

ジルベールがその場を抑え、私は現在も猫化状態よ！！

普通なら、猫化した人型の女の子って大騒ぎになると思うよね？  
私もそうだった。

が、この世界には人型に獣耳尻尾を持つ人はそれなりにいるらしい。  
さすがに妖しげな液体を飲み、獣化した例は私が初だとか。

うわっ〜初めてだつて〜、困っちゃう〜（棒読み）

獣人族と言っらしい彼らは、人の姿にも獣の姿にもなれるんだつて。

試しにやってみたら、私も獣型の猫になれた。

銀色の艶々した毛に、エメラルドの瞳。

鏡で初めて見たときの私の嘆きは語るに及ばないけど。

どうやら異世界に来て、銀髪緑眼になってしまった模様。  
もとに戻りますかね？

黒髪黒眼が恋しく思う日が来るなんて、夢にも思いませんでした。

この国… ヴィシライーフア帝国（やっと覚えましたが）は今平和  
なんだけど、周辺諸国は戦争の真っ只中で一歩外に出たら危険地帯  
ですつて。

何故、ヴィシライーフア帝国は戦争に巻き込まれないのかといえば、  
ヴィシライーフアの地は遙か昔から最高神マライラティの降り立つ  
た聖なる地として崇め立てられており、何人たりと血で聖地を穢し  
てはならない。と言われているため難を逃れてるつて、メイドさん達  
が教えてくれた。

ヴィシライーファ帝国を始めとする強豪国がある地一帯をラムスイアーナ大陸と言う。

ラムスイアーナ大陸には、大まかに宗教は二つしかない。

一つは最高神マライラティを主神とするマライラティ教。

もうひとつは、魔界の破壊神ティルテアナーゼを主神とするティルテアナーゼ教。又の名を魔神教とも邪神教とも言う。

マライラティ教を信仰する割合が高いにせよ、ティルテアナーゼ教を信仰する国も民もおり戦争を仕掛けてきたのはティルテアナーゼ教信仰国である。

今現在、マライラティ教信仰連合国軍… 通称ユリナフィ連合国軍側の優勢らしく、このまま行けば良いのだが漠然たる不安が拭えないらしい。

ヴィシライーファ帝国の帝都は、アリスライラと言い聖地として名を知られているが水の都としても名高く、至るところに水のオブジェや綺麗な水が流れている。

当然、大将たるジルベール・デュイ・フォートリエの邸宅も、アリスライラの中心部に程近い場所にあると思うのが普通のはず。

なのに、何故？

見渡す限りの山々。

街が遠いんですけどー？米粒サイズだよー。

アリスライラの中心部から北北西に位置する辺鄙な場所に、フォートリエ邸がありました。

不便でしょ、色々と。

魔法で行き来できるから問題ない？  
私は魔法使えませんが。嫌味ですか？

「いじけてる所、悪いが仕事行くぞ」

「行つてらっしゃい」

全然、悪いと思つてないよね？ジルベールよ。  
現在時刻は日本時間で言う、朝の八時三十分。  
ジルベールの仕事は九時から軍本部で始まる。  
要はそれまでに行けば良い話なんだけど。

「何を言つてる？お前も行くんだぞ」

「いやー彼処はムサイー暑苦しいー華がないー」

「軍本部だ。当たり前なことを言うなバカ」

「左様ですか…」

こうして私は、ジルベールに抱きしめられたまま何度めになるか分  
からない空間移転<sup>テレポート</sup>で、軍本部へ行くことに。

軍本部の正面入り口付近に、テレポートで現れた私とジルベール。  
チラリとジルベールが私に視線を投げ掛ける。

ハイハイ、言われずともわかってますよう。

瞳を閉じ、意識を集中させ獣型たる猫に身を変化させる。

「ん、行くぞ」

「うにゃあ」

軍人でもない私が、軍本部に入れる理由は獣型だからです。はい。現皇帝陛下のお許しがあるため、誰も何も言いません。嫌だね、権力って。

そして九時から仕事が始まるのだけど、私はジルベールの執務室ですやすやす寝てるのが大半。

獣型になったら、猫の体質に組みかえられるのかとにかく眠いの。

ジルベールの執務室の、ソファァー・執務机の上・膝の上何れかと言っただけ限定。

まあ、無理やり膝の上に乗せられ寝ると言われるのが何故が一番多いのだけど。

充実した毎日です。

屋敷に帰ったら帰ったで、また大変。

「ルウ、ルウっ、ルウ!!」

「煩い。聞こえてるし、触るな猫耳を……尻尾もっ」

「もったか？わがままだな。だが可愛い」

「聞けよ、話!!」

「聞いてるぞ」

なら何故、あなたは私の服の中に手を忍び込ませようとしてるの？  
胸を揉まないで頂きたい。

小さいのが嫌なんだろ？大きくしてやる。って？  
なんで胸のコンプレックスを知ってる？ジルベール。

私のことで、分からないことはないって？  
引くんですけど。

「子供は男女どちらが良い？ルウに似た女兒なら可愛いだろうな」

……結婚もしてないし、恋人でもないのになんで子供の話に跳躍し  
てるの？

色々飛ばしすぎです。

このまま行けば、知らぬ間に婚姻届にサインすることになりそうな  
気がしてならない。

## ドラゴンに遭遇しました。

その日、なんの手違いか分からないけどテレポルトに失敗したジルベールによつて、私はフォートリエ邸ではなく何処かの森に飛ばされました。

テレポルトに失敗した時のジルベールの焦った表情、初めて見たよ。あれは見ものだった。

「で、何処よ此処」

見渡す限り、木々しか見えません。

森は複雑に入り組んでおり、間違いなく迷いそうである。こういう時は、動かない方が良くないか？

と、その時ズシンズシンと地響きがした。

気のせいではないです。揺れてます。地面が。

「ひきよっ…どっ」

叫び声なのか人語とは言い難いような言葉が出たけど、気にしない。それよりも、木々の間から姿を現した巨体に釘付け。全長何メートルか知りませんが、とにかくでかい。間違っても人間ではありません。

白銀色の、蜥蜴のような体躯に長い尻尾。ごく丁寧に飛行用の蝙蝠みた  
いな翼まである。ついでに鋭い爪に牙は、刺さったら痛いを通り越  
してあの世行きだろう。

西洋のドラゴンに酷似している。私はどちらかといえば、東洋の蛇  
のような龍より西洋の蜥蜴のような竜が好き。

高校時代に一度、ドラゴン好きの友達とどちらか派で論争したこと  
がある。（友達は東洋派でした）どうでも良いよね、それ。

金色の瞳は綺麗だな。って現実逃避しそうになってる場合じゃない  
のは分かってるつもり。

ってかね、逃げなきゃなんだけど腰抜けて動けません。

その間にも、ドラゴンは巨体を私の方へ向け近づいてくる。ちよう  
ど私の目の前に顔を近づけられ、カパリと口をあけたドラゴン。

もしかなくても食べられますか？捕食ですか？

美味しくないですよ。激マズに違いありません！お腹壊しちゃいますよ、  
ドラゴンさん。

「グルルルルッ……」

唸ったかと思うと、ドラゴンは私の顔を舐め舐めしてパクリと銜え  
られました。

このまま咀嚼されれば、死ぬでしょう。

変に刺激して最悪の結末にならないためにも、じっとしていた私を  
褒めて……！

暫くして、ドラゴンは私を離してくれた。

ありがとうございます。命拾いました。たぶん。  
唾液でベトベトだけでも。

「娘よ、この世界の住人ではないな」

「……………へおっ？人の声がする」

「馬鹿者。どこをキョロキョロしておる。我だ」

「えっと……………ドラゴンさん？」

「左様。しかし我には真名ではないにせよ、サマンティトラと呼び名がついておる。ドラゴンはやめたまえ」

「ごめんなさい、サマンティトラさん」

「サマンティトラで良い。何なら愛称でも構わぬ」

「サマティとか？」

「構わん」

……………何だか、話してみるとドラゴン……………改めサマティは悪いドラゴンではないみたい。

唾液でベトベトにされた顔やら身体（服）は魔法で綺麗にしてみました。便利だね！

ほっとしましたよ、ベトベトした状態で人前に出れる勇氣はありませんから。

「異世界人を見るのは、幾世紀ぶりか。久しいな」

次元が違う。

年単位じゃない…

嗚呼、ここはやはり私がいた世界とは違うのだ。

ドラゴンや魔法がある時点でもうファンタジー確定だけど。

「だが異世界人であるが故、このナイトドラの森に入れたのやも知れぬ。

そなたの名はフム、ルウか。良い名であるな」

「……私名乗りましたか？」

「いや。魂に刻まれた名前を見させてもらった。不快にさせたならすまぬ」

「いえ、構いませんが」

もうなんでもありだな。

あはははは……。

笑うしかない。

それにしてもやはり、ルウなのね。本当は瑠羽なのに。

「それはそなたの真名であろう。我が呼ぶに憚られる」

「そうですか…。サマティは、ずっとこの森に棲んでるんですか？」

「本来なら我は、あちらに棲んでおる」

彼がクイツと指で指した先は、大空でした。……空？

「此処からでは人の眼には見えにくいか。  
雲の上にある宮殿が我が住処」

「へえ……雲の上に宮殿」

良く落ちませんね。

落ちないように魔法でもかかっているんでしょうか。  
さすがファンタジー！！

「む？人の気配がする。そなたの知り合いか」

「……………？」

「フォートリエ大将と呼ばれてるみたいだが？」

「ジルベールかつ！！」

そういえば、テレポート先に失敗して飛ばされたんだっけな。  
ああ、戻んなきゃまずいかな。

「戻るが良い、ルウよ」

「また会えますか？」

「そなたが会いたいと願うならば、ナイトドラの森は道を開くだろ  
う」

「？」

道を開く？

意味はわからないが、またこの場所でサマティに会えるらしい。  
手を振って別れた瞬間、私は森の外に突っ立っていた。  
直後、身体に衝撃が。

「ぐふっ！！」

「ルウ！！無事か」

「……大丈夫。でも離してくれなきゃ大丈夫じゃなくなりそう」

「圧倒されてですね？食べたものがリバーズしそう。告げると、ジルベールは渋々ながらも離してくれた。」

「すまなかった」

「ジルベールがシヨボンとした顔で謝ってくる。捨てられた犬みたい。言ったらお仕置きされそう。」

「何がだ？」

「ジルベールが捨てられた犬みたいってはない……」

「ほお？」

「ひょわっ…違う！これはつい口が滑ったと言っか」

「言い訳はベッドの中で、ゆっくり聞こう」

「殺す気ですか！？」

「ルウはちっちゃいからな。辛いかもしれん。まあ頑張れ」

「他人事だと思って！。ムカつく！！」

「そりゃ、私19歳の割に身長152・6cmしかありませんが今更どうにもできません。どうせちびですよ。」

「鬼―悪魔―っ」

「話中悪いが、妾はもう帰ってもよいかえ？」

「へっ？」

視線を向けた先には、羨ましくらいナイスバディの美女さんがいました。  
数多の男を手玉にとってそんな妖艶さを湛えた彼女。私は背伸びしても届きそうにないですよ。

「ああ、助かった」

「別にお主のためではない。妾がルウに会いたかっただけじゃえ」

そう言つて、私の猫耳に親愛のキスだろうかをして去って行った美女。何故猫耳にキス？  
つてか誰っ？

「皇帝陛下だ」

「へえ、皇帝陛下……っつてうえええっ」

女帝とか言うやつですか。

その方と対等に話すジルベールは何者ですか。

「あ、ジルベール。私またこのナイトドラの森に来ても良い？」

「ナイトドラの森？なんだそれ」

「だからそこにある森」

「森なんかないぞ。この先は霧に覆われてはいるが湖があるだけだ」

ジルベールが痛い子を見るみたいな憐れむような眼差しで見ってきた。

「だって本当に……あれ？」

そこにはジルベールが言うように霧に覆われ視界が悪いが、湖に繋がる道があるだけ。

広大な森は夢を見てたかのように、存在していなかった。

「……どうして」

「熱はなさそうだが」

ペタペタ私の身体を触るジルベールを他所に、  
いまだに信じられず  
に湖がある方角を見つめる。  
あれは夢？幻？  
そんな訳ないよ。

ナイトドラの森。

それは、限られた異世界人にしか見えぬとされている秘された森。  
白銀に光り輝く天竜が降り給う地とも…

## ヴィシライーファの過去

現在、ヴィシライーファ帝国の皇帝の座に君臨するのはパトリシア・ユレ・シャレットという歴史上初の女皇帝であるのはヴィシライーファ帝国並びに周辺諸国に知れ渡っている周知のことだ。

今年211歳になる彼女は、身長175.9cm（体重は秘密）とヴィシライーファ帝国内において女性の平均身長より若干高めである。

牡丹色の髪・翡翠の瞳の女性と言えば、真っ先に候補にのぼるだろう彼女は、本来ならば皇帝の座につくはずもないシャレット伯爵家の娘であった。

今から53年ほど前までは、ヴィシライーファ帝国はバシエレリー朝と呼ばれ、バシエレリー家の直系が代々皇帝として治めていたのだが先代皇帝の時代は酷いものであった。

圧政を敷き、嘆きの声が日々大地に響き渡るほどに。

ジルベールの母、旧姓ミレーユ・デュイ・バシエレリーはバシエレリー朝最後の皇女であり、他国の皇子との婚姻を棒に振って臣籍降嫁した姫君である。

その嫁ぎ先はフォートリ工侯爵家で、当時当主だったのがジルベールの父親にあたる人物だった。

ミレーユが嫁いで30年。彼女の夫は不満を持つ貴族や軍人を纏め、先代皇帝に反旗を翻した。

1年半に渡る激戦の末、皇帝軍は敗れ皇帝も反乱軍の前に膝を折り

2635年続いたバシエレリー朝の時代が終わりを告げる。

国には当然トップに座する君主が必要だが、一番戦功をたてたジルベールの父親は、皇帝の座を断った。

息子であるジルベルもまた、身体を動かす方が性にあってる。とのことで皇帝を辞退し、フォートリ工家と血縁関係にあるシャレット家に白羽の矢が立ったのだがパトリシアの兄は病弱であり、弟は生後間もない赤子。

もうこの国は終わりか？と嘆く大臣たちの視線の先に映ったのがパトリシア。

このさい女性の皇帝でも良いではないか。とパトリシアを皇帝に仕立てあげたのだった。

「そんなことがあつたんですか」

ふえ〜としながら、目の前に出されたケーキをもぐもぐ食べる私の前には、皇帝であるパトリシア陛下が妖艶に微笑みながらいた。

つくづくこの時代の異世界に飛ばされて良かったと思う。  
内乱の真っ只中な国で、生き残れる自信ありませんから。

午後3時過ぎ、軍本部にあるジルベールの執務室のソファァーで昼寝

をしていた獣型の私の前に、いきなり現れた陛下は何か言う前にレポートで王宮の一室まで連れ去りました。  
ジルベールは、鍛練の時間のため部屋には居なかった。  
私が居ないと知ったら、どうなるのか想像したくありません。

ダダダダっ

何やら足音が響きます。かなり焦ってる模様。  
何かあったんですかね？

「ルウツ！！」

「お主の騎士ナイトの登場か。さすがじゃえ」

「皇帝陛下。どういっつもりだっ！」

そこには、焦りを帯びたジルベールが居て。

汗で髪が貼り付いていて、すごいことになってます。

視界に入れるのも怖いけど、気になっちゃっし。自分の性格が嫌だ。

部屋の中に入ってきたジルベールは、ソファアの後ろで足を止める。

何か視線を痛いくらい感じるんだけど、何故に！？

「怒るでない。ただ話をしていただけじゃ。お主、最近ちと怒りっぼくないかえ？」

「貴方にだけは言われたくない」

「妾がいつ怒った？」

「三日前だな。夫婦喧嘩するなら、人目を気にしろ」

「む……それはあやつが悪いのじゃー！」

「どうしても良いが、早く仲直りしてくれ」

……へえ。パトリシア陛下、夫婦喧嘩中なんだね。

ジルベールも臣下として、心配してるんだ。と見直したのも束の間。

「影響が出て仕事が増え、ルウとの貴重な時間が減るだろうが。そうなれば死活問題だ」

……全然心配してない。

私との時間は、減らされても良いくらいだと思っけどジルベールは少ないらしい。

死活問題でもないし。我が儘だねえ。

「……言われるまでもなく、分かっっておるわ」

つてええっ!?

そこ納得するところ?

私には理解できません。が、仲直りはして欲しいです。  
旦那さん、どんな人でしょうか。気になります。

「フォートリエ大将」

ソファーから私を抱き上げ、部屋を退室しようとしたジルベールに  
パトリシア陛下が声をかけた。

「大元帥殿が、お主を探しておったぞえ」

「……………大元帥?」

「大方、ファイラントウルの件で有ろう」

ファイラントウル?と首を傾げる私を他所に何の事が察しがつくよ  
うで、ジルベールは少しげっそりした表情で頷き返した。

その後、獣型に戻った私を伴ったまま軍本部の大元帥らしき人の執  
務室へ寄ったジルベールに告げられたのはファイラントウルへの転  
属命令だった。

ちよつぱりシリアスな展開でしょうか。

ヴィシライーフア帝国における軍の最高位は、大元帥である。67歳の時に、大元帥に抜擢された彼はパトリシアの夫の弟であるのを抜いても異例の出世だろう。

その彼は、最近めちやくちや不機嫌でも、時折何かを思い出しては微笑まれる。

ある種、不気味極まりない事態。

もしや何かに憑かれているのでは？

と、噂されている。

且つ、彼の機嫌を損ねたりした人物は辺境の地へ左遷されているとも。

彼の部下たちが噂の出所なため、信憑性は高いとも言えた。

ジルベールの場合、今回の転属命令は八つ当たりとも言える。任務遂行しない限り、アリスライラには戻ってくるな。むしろずっとそこに居ろ。と言われたらしい。

>br<>br<>br<「ジルベール？何処行くの？」

大元帥からジルベールへ、ファイラントウルへの転属命令を受けて3日後。

大した準備もしないまま（それでいいの？）、出発日前日を控えたある日。

ソファアで寛いでいたジルベールがいきなり、出かけてくると言い出したので、声をかけた。

「父上のところだ」

「お母様の所には行かないの？」

「……皇帝陛下から聞いたのか」

こくと頷けば、ジルベールは複雑な表情を浮かべた。

あれ？ 聞いちゃまずかった？

内心冷や汗を流す私に、ジルベールはそつと頬を包むように手を添えた。何だか、顔の距離が近い気がするんだけども！！

「ミレーユ様は、俺と血が繋がっていない」

「え？」

「父上の後妻だ。俺は前妻の子だからな」

「ジルベール……」

「そんな顔をするな。俺は全然気にしていないぞ。

それよりも、ファイラントウルはここよりも気温が高い。バテるな」

「…私、も…行くの？」

「当然」

「ちなみにどれくらい？」

「灼熱の街とも言われているくらいだ。お前の言う世界の言葉に直すと50 以上だな」

「し、死ぬー！！いやーお留守番するー！！」

「却下。魔法で温度調整できるから、死なん。

「じゃあ、大人しく待ってるよ」

「鬼畜！！」

「なんとでも言え」

と笑うジルベールは、抗議する私の頭をぼんぼんと数度撫でるとソファーから立ち上がって扉を開け、出て行ってしまった。

ちよっぴりシリアスな展開になってたばかりなのに、いつのまにかジルベールの一言でそれどころじゃなくなったじゃん。

でも、義理のお母さんだよな？

何で、ミレーユ様なんだろう？

ミレーユ義母上とは、呼ばないのかな…。

複雑な関係なのでしょうかね。

気にしてないと言ってたけど、本心？  
違う気がします。

羽が生えました。

ジルベルが出掛けて行ってから、一時間弱。  
暇だ……もの凄く。

読書をして時間を潰そうにもね？

文字が読めないのよ。

いや、最初言葉が通じなかったから文字もだろつなと予想はついてたけど（何より異世界だし）。

なら覚えれば良いじゃん？って思うよねえ。

私も、最初覚えようとしたわよ。

なのに、なのにね！！ジルベルが反対して、未だに習得できてないの。

理由？

忙しいからダメだ。の一言で即切り捨てられましたよー。

別に教えてくれる人は、ジルベルじゃなくても良いのよ。

何故に、自分で教えたがるのでしょうか？謎だ。

意味不明な文字の羅列が並んでる本をぼんやり眺めるのも、一日で飽きました何が。

決して飽きっぽい訳じゃない。やっても虚しかったから、やめただけですー。

「暇なんだ？」

ソファアにだらしなく寝そべっていたら、一体いつ来たのかノエルがソファアの背もたれ越しに覗き込んでいて、吃驚して飛び起きた。

「うぎゃあああ！出たあ！諸悪の根元！」

「君、何気に酷いね」

「酷いのは、ノエルです」

ノエルは然も心外だ。と言わんばかりだけど、私が思ったことは間違いないはず。

猫化の原因を作ったのは、彼なのだから。そして、もとに戻してくれる気配皆無。

泣きたい。泣いても良いですか？  
つて泣いたところで、このノエルと言う魔法使いはドSだから調子に乗るだけかもしれません。

私の中にあつた魔法使いのイメージに、腹黒くドS。を無理やり追加してくれちゃった人です。  
勿論、魔法使いすべてがそう言う訳じゃないですけど！  
ノエルは、まさしくそれだ。それしかない。

「何か用ですか？ジルベールは出掛けてますよ」

「知ってる。さっき会ったからね」

「そうですか。……って何、それ」

「何ってお菓子。クッキーだよ」

そんなことも分からないの？と言いたげなノエル。

失礼な、お菓子くらいわかりますよー。

聞きたいのは、何故にお菓子があるのかと言っこと。

何処から出したのやら（また魔法ですかね）、はいどうぞ。と（こ  
れまた何処から出したのか分からない）お皿の上に乗つけたクッキ  
ーを渡された。

「食べるど？」

「そうだねー」

にににに。

その微笑みの裏に何か悪いことを企んでませんか？  
前科があるので、素直に受け取って食べるのが怖い。

お皿にあるクッキーと、ノエルを交互に見る私に気が付いた彼が苦  
笑しながら口を開いた。

「それ、ジルベールからルウちゃんに渡してって頼まれたものだよ」

「あ、そう」

ジルベールからなら大丈夫だと安心した私は警戒心を解き、いただきますとクッキーに手を伸ばして食べ始める。

本来、ジルベールはノエルに渡すより、何があろうと直接私に渡すことを選ぶ。

他人任せには絶対しない性格だ。

おかしいと気付けば良かったのに……。

此处で気付けなかった私は馬鹿だった。

相手は魔法使いで、目的のためには手段を選ばないノエルである。クッキーをジルベールからだと偽ることくらいしそうな人。

案の定……

「なにっ……背中むずむずするっ……」

「あ、成功だね。クッキーに薬を混ぜてたんだよ。うんうん」

「へっ？」

ノエルの指差す先は、私の背中で。  
タラリと汗を流しながら、振り向くと純白の羽が生えてました。  
クッキーに薬を混ぜた？……ジルベールからじゃないんですか！？  
騙されたっ！！

「まだ試作段階だったんだけどねー」

私で試さないでよ、それ。やるなら自分で試してください。  
ノエルの実験台じゃないのですがつ。  
悪態ついていると、身体がふわりと宙に浮く。

「きゃああっ！！」

一定の間隔で動くことから、猫耳尻尾に続きこれも本物？みたいで  
す。

「ちゃんと飛べるみたいだね」

「もとに戻して……」

「やだな、僕の楽しみを奪わないでよ」

「どこが楽しみなんですかつ」

抗議の声は、意味をなしません。

今後、金髪碧眼の魔法使いを見掛けたら、何かされる前に逃げ出そうと誓った。

数時間後、帰宅したジルベールは背中から羽が生えた私を見てポカーンとしていたが、最初だけで。

「本物か？」

と、興味津々に触りまくる始末。  
引っ張らないでほしい。痛いからっ。

フツと威嚇する私を、ジルベールは面白そうに見て笑い次の瞬間。

「うひゃあっ…んっ」

カブリと耳に噛みついた。

拳げ句、尻尾を撫でるばかりか、お尻まで撫でる始末。

セクハラ云々言う前に、尻尾や猫耳を触られると変な声が出てしまうの何とかならない？

性感帯だから無理？

……何だか、だんだん人間離れしていきそうです。

「ルウ、そんなに涙を潤ませて俺を誘ってるのか」

「っん……誘ってなっ……はっんっ……」

「そっ焦るな。ベッドでちゃんと變げてやる」

「違っ……っ……!!」

嬉々として私を抱き上げて、寢室へ姿を消す。

こんなことしてて良いわけ？

明日、ファイラントウルって所に行くんだよね？

準備は？万端じゃないよね？ねっ？間に合わなくなるよ。

「ルウと愛しあうことを優先せずに、何を優先するんだ」

……ファイラントウルへ行く準備だと思う。してるの見たことないし。

余裕そうにしてるけど、大丈夫なの？

……それを言うなら、私もか。準備してないもんね。どうするんだろっ。

他人事じゃないような……。

「良いから、もう黙れ」

「んっー、ジルベール…ルっ」

「ルウ、可愛いな」

「んっっー!!」

抵抗虚しく、私はジルベールに食べられました。それはもうぺろりと、満足するまで。しくしく。

明日起き上がれなかったらジルベールのせいだよ。

はっ、そうならファイラントウルに行かないで、お留守番できるかな。

ちよっと希望が持てました。

いざ、ファイラントウルへ。

ファイラントウルへ行く当日。

腰が酷く痛み、ベッドの住人と化していた。

普段、動かさないような場所までもが、悲鳴をあげているかのよう  
に。

対してジルベールは、平然としていて。

腰痛？なんだそれは。

と言わんばかりに、ぴんぴんしており元気でした。

微笑みながら私を見てくるジルベールの背景に、お花畑やらハート  
など乙女チックでキラキラしたものが見えたのも気のせいよ。  
疲れてるのよ、うん。

ジルベールを刺したるかと思ったのは内緒です。 しませんけど。

軍人さんは得てして体力がありすぎだ。

相手にするの大変だと抱かれるたびに思います。

でも嫌だと思わないのは、何故でしょう？

彼氏だったヘタレ明樹よ。

私は貴方のこと好きだったよね？

異世界に来て、明樹に対する恋愛感情が薄れてきてるんだけど、ど  
うすれば良いかなあ？

ついでに言えば、ジルベールに惹かれてるような？

もし、日本へ戻れたとして明樹のこと愛せそうにない可能性が高い  
よ。

だから、勝手だけど私のこと忘れて新しい恋を探して欲しいの。ご  
めんなさい。

……って伝えようにも、方法知りませんが。

「あつっゝ起きれないゝ」

昨夜ジルベルが嬉々として張り切りまくり、長時間手放してくれなかった結果、未だに痛みを訴える腰。

「……まだ、ベッドに居るのか」

声のした寝室の入り口付近を憎々し気に見れば、ジルベルが呆れた顔をしていた。

「誰のせいよ、誰の」

「ふむ……俺か」

「分かってるなら……ってか、さっさとファイラントウルへ行けば？  
私は見ての通りこんだから留守番しとくよ」

と、嬉しそうに言っ。

動けない事を口実に、留守番できるし。  
誰が好き好んで、暑い街に行くものですか。  
ベッドの住人と化さしてくれてありがとう、ジルベール。

「馬鹿か。変更はしない」

ルウも予定通りファイラントウルへ行くんだ。と告げるジルベールに、私の顔から笑顔が消えた。  
掛け布団を剥ぎ取るとジルベールは、痛む腰の辺りに手を置き魔法をかける。

するとあら不思議。

痛みもなくなり、ベッドから起き上がった。

物事、そんなに上手く運ばない。

まさにその通りだと思う。

私が居る異世界は、ファンタジーな世界です。魔法が存在するわけよ。

それ忘れてたわ。すっかりね！

「よし、着替えて行くぞ」

「ノオーーー！！」

「ルウの魂胆など、見え見えだ。残念だったな」

「……………やっぱり鬼だ、悪魔だ」

「早くしろ」

……………無視か。無視ですか。

急かすジルベールに、渋々ベッドから起き上がり床に足をついた途端。

いつから居たの？スタンバってたの？と聞きたくなるくらい、わらわらとメイドさんたちが出現。拉致られました。

メイドさんたちに別の部屋に連行されていく私の背中に

「外で待ってる」

と、ジルベールの声が聞こえた。

メイドさんたちが選んだ服に着替えてる最中、ふと思う。

私の背中にはノエルの仕業で、羽と言うか翼が生えちゃってる訳じゃない？

何故に服に穴が開いたり破れたりしないのか不思議なんだけど。

今着てる服も、背中辺りに切れ込みだとかそう言うの無いし。それも魔法？

限度というものや、魔法じゃ出来ないことないの？ねえ。

便利すぎじゃない？

私も魔法使えたらいいのに…。

魔法使うには魔力？が必要なんだっけ？

後は素質とか？

ノエルが詳しいと思うんだけど、見返りに何かとんでもないものを要求（実験台に）されそうで怖くて聞けない。

ジルベールも魔法使えるから、今度聞いてみようかな。

でもでも、私が居た世界は魔法なんてファンタジーの中での話でしか存在してないから魔力なさそう…。

うんうん唸りかけてた私を、現実世界に戻したのはメイドさんたちの声だった。

「お似合いですわ〜」

「いつにましても可愛いらしゅうございます。次はお化粧を致しましょうね」

「……………はあ」

その後、化粧も施され何度か身だしなみをチェックするメイドさんたち。

彼女たちが満面の笑みを浮かべ頷いた後、私はジルベールのもとへ送り出された。

ジルベールは部屋を出たすぐの壁に瞳を閉じたまま腕を組んで凭れ  
ていて。

私が近付くと、瞳を開けて壁から身を離した。

「……似合ってるじゃないか。可愛いぞ」

「あり、がとつ…」

正直、ゴスロリ服を着ることになるとは夢にも思わなかった。それも異世界で。

まあ、ロリータ服じゃないだけまだマシな部類かな？

私的に、似合わない気しかしないんだけど皆可愛いつて言うの。

……本当かな？

ジルベールが嘘ついてる風にも見えない。

……眼科勧めた方が良い？

それにしても、軍服着たジルベールとゴスロリ服を着た私ってある意味ミスマッチである気がめちゃくちゃします。

年齢もさる事ながら身長差もあるし、親子？

いやいや……この場合は、何らかの罪を犯し連行される罪人。

……もしくはロリコンに走った危ない軍人と、可哀想な少女。に見えなくもない。

事情を知らない人に通報される事態にならないことを願う。

だってね？ファイラントウルへはレポート出来ないんだって。

何でもファイラントウル周辺に張ってある結界が、魔法を跳ね返してしまうかららしい。

ファイラントウルへは、ギリギリ弾き返されないとこるまでレポートで行き、後は歩き。

馬に乗るとか、馬車って案もあつたけど拒否りました。  
馬には関わりたくないんだよ。

ある意味、トラウマなの！

(ノエルのせいだ、絶対)

そうこうしてる間に、ファイラントウルへ到着しました。  
言って良い？

「暑いー死ぬー」

ただいまの気温、62。

これでもまだマシな部類だそうだけど、死ぬよ本当に！

正午を過ぎれば更に高くなるらしい。

此処に住んでる人たち、凄いな。私には無理。

額やら身体からダラダラと汗が流れて、拭っても拭っても次々出て  
キリがない。

ジルベールは暑さなど微塵も感じさせない雰囲気のまま、歩いてる。

何、この差は。

……ジルベールって人間？

あり得ないー。

「そんなに暑くないだろ」

「何処がよ……」

もう答えるのも億劫。

早く、涼しい所に行きたい。

その気持ちしかない。

「その服は、通気性も良く涼しいようになってる。

布地は薄く、詳しくないから曖昧だが、アシャルミイヤの毛だったか？糸だか何かしら使われてるはずだが……」

おかしいな。と言うジルベール。

おかしいのは、貴方だよ。うん、本当に。

魔法もなしに、あまつさえアシャルミイヤが使われてる軍服を着てるでもないのに汗ひとつ流さないのは何故？私の知らない間に魔法使っちゃったのかな？なら、まだ納得できるよ。

……あれ？ところでアシャルミイヤって何？

「なにそのアシャルミイヤって？」

「熱を寄せ付けない生き物だ。熱帯地方で重宝されている。姿はファイラントウルで生活していたらいつか分かるだろ」

教えてくれたっていいのに。  
あれか？百聞は一見にしかずってやつ？  
直接見て知れと言いたいのか？

「へえ……」

もう、何でも良いからさあ。  
ファイラントウルで過ごすことになってる屋敷へは、いつ着くの？  
熱中症になって倒れそう……。

## ファイラントウルの結界

ファイラントウルへ入ってからどれくらい経ったか分からないけれど、どでかい門が見えたあたりでジルベールに話しかけられた。

「ルウ」

「はあい…なーに？」

「……いや、大丈夫か」

ジルベールは、私を上から下。下から上へと全身を見て一人勝手に納得したかのように頷く。

何処が大丈夫なの？

私は全然大丈夫じゃない！

耳も尻尾もそれを肯定するかのように、だらんと垂れたままですよ  
！。

「いいから黙ってる」

何がいいからなのかさっぱりなんだけど、反論する元気もないので

微かに頷くにとどめおいた。

見上げた先には、先ほどよりも近くなったどでかい門が、これでもかと言わんくらいに存在をありありと出している。

何の門？と首を傾げた私。

文字が読めないから、門の所に書いてある文字は役に立たない。

当面の目標。

ヴィシライーフア帝国の文字習得にしよう。と、決めた。

不便すぎるし、何も出来やしないわ。はあ…。

そして詰所らしき場所から出て門の通行人に対応していた、軍服を着こんだ軍人さんが近づいてきた。

今更だけどジルベールの軍服は、白と黒を基調とした布地で、上に着ているロングコート？のようなのは白だ。

背中辺りに、咆哮をあげたようなライオンが黒い満月と、クロスした剣を背にデザインされている。

左腕のは、小さな星と銀の三日月の先にある水色の玉の上に何かしらの文字があるけど…やはり読めません。

ヴィシライーフア帝国の軍人だ。みたいなことでも書かれているのかなあ？

ちなみに左腕部分に描かれているデザインは、小さめで遠目からでは判断がつきにくいと思われる。

そのジルベールの軍服に対して、ジルベールと話している軍人さんのは、白と青を基調にした布地に、白いロングコート。背中には、青い満月とクロスした剣を背に咆哮をあげる狼だった。

同じ軍人でも所属が違ったりするせいかな？と少し離れた場所から二人を見ながら思った。

「ジルベール・デュイ・フォートリエだ。中央から通達されているとは思うが……」

「これはフォートリエ大将、ようこそお出で下さいました。大元帥閣下から直々の任務だと伺っております。

……そちらの猫の獣人もですか？」

途端、忌々し気に嫌悪感を隠さない眼差しで私を睨み付けてくる軍人さん。

……嫌われてるのは分かったけど、何故？

獣人って嫌われもの？

差別は良くないよ！

「こいつは人間だ。魔法使いアルベール繋がりだから、獣人族ではない」

「……はっ、そうでしたか」

ちょっと！何で、ノエルの名前出ただけで納得しちゃうわけ？  
もう少し、腑に落ちない。みたいな態度でも良くない？

ノエル…

ファイラントウルでも名前知れ渡ってんだね。  
軍人さんを納得させちゃうほどの有名人？

「行っても良いか？」

「はっ、申し訳ありませんっ。どうぞお通り下さい」

「感謝する。……ルウ行くぞ」

「あ……うん？」

展開についていけない私の手をシルベールが引き、門を潜ろうとする。  
る。

……ひとつ言わせて。

何か、滅茶苦茶密着してるんだけどっ！

暑い！暑すぎる！

バタバタと暴れ、離れようとする私を更に自分の方へ引き寄せせる。

何の罰ゲームよっ！

「離してっ…暑いっば」

「静かにしてる。ルウの為だ」

「は？」

ポカーンとした私は暴れる力が弱まった。

それ幸いとばかりにコートの中に私を抱き寄せたジルベルは、門を潜った。

「っ！？」

一瞬、体の芯から凍りそうなまでの感覚に支配された。

一体、何だったの？

潜った門を見るけど、何ら変化はない。

気のせいなはずはないのに。正体の分からない感覚に、僅かに震える。

「……大丈夫か？」

「さっきの……」

「結界を通り抜けたんだ。慣れないとキツいな」

ぼんぼんとジルベールが、私を落ち着かせるように背と髪を撫でた。私は、そのジルベールに縋るように抱きつき胸に顔を埋める。

数分、ジルベールに抱きついたままでいた私は落ち着きを取り戻し我に返ると慌てて離れる。

……恥ずかしすぎる。ここ外だったし。

「此処からが、ファイラントウルだ」

「……はい？」

初耳なんですけど。

まあ、確かに門を通り抜けるまで建物らしきものは一切なかった。おかしいとは思ってたけど、ファイラントウルの中じゃなかったのね。

納得しました、はい。

「まだ暑いかな？」

「うん…少し」

「ブリーユゼティム」

ジルベールが唱えると、私の体を何かが包むように纏わりつき消えたと同時に、体感温度が下がったような気がした。

「魔法をかけたから少しはマシだろ」

「……ありがとう」

でも、涼しくできる魔法あるなら最初からやってよ。

今まで暑がってた時間は何よ。と思っただけど結界のせいで魔法使えなかったことを思い出し頂垂れた。

あれあれ？

だったらジルベールは魔法も使わずに、どうやって暑さのなか平然としてたの？

納得できません。

結界を通り抜けた先からは、魔法制限なくなるみたいだけど結界がある意味は何でしょう？

ファイラントウルの謎その弐だなあ。  
きほ、アレよ。  
アシャルミイヤね。

歩くこと、10分。  
目の前に立派な門構えをした、建物が見えてきた。

「ファイラントウルにおけるフォートリエ家の別邸だ」

「……そう」

「狭いが我慢してくれ」

「……………」

「……ルウ？どうした？」

狭い？

どの口がそんなこと言つの？

明らかに、私の家の数倍ありますけどもっ！

嫌みにしか聞こえないよ。

貴族って嫌ね。

金銭感覚は元より、その他色々と感じがおかしい！

「お金持ちって嫌いー」

「……………?」

急に訝しげに私を見てきたジルベールは、いつかのように私の額やら体をぺたぺたと触る。

「なにしてるか聞いても?」

「ルウがおかしいから、何処か患ったのかと心配してるんだ」と、言いながら尚も触るジルベール。

おかしくない…。

私は普通だ。

ジルベールの感覚の方がおかしいから。

気付こうよ。

「……………」

それを言う気にもなれないけど、早く中に入らない?くらいは言い

たいかな…。

今のところ人通りは皆無だけど、そのうち人が来て目立ちそうだし。

それを告げると、ジルベールは私を連れて門の先にある玄関扉へと歩き出した。

余談だけど、玄関に辿り着くまで15分ほどかかりました。  
遠すぎるってば…！

問題大有りです。

時間って過ぎるのが早いもので、漸く落ち着けた頃には既に太陽は沈み、月が姿をあらわして闇と静寂が支配していた。つまり、夜ね。

ご飯も食べ湯殿で一日の疲れを癒したあとは、寝るだけ。ここファイラントウルの屋敷でも、いつもの如く私と同じ部屋のベッドで寝ようとしたジルベール。

当然、拒否ったわよ。  
問題？あるわよね？

暑苦しいのよ！！

ええ、確かにね温度を調整できる魔法具だかのおかげで室内の気温は快適だけでも、密着すれば暑いじゃない？

抱きしめて寝ないなら、まあ拒否らなかつたかもだけどジルベールの場合かなり高確率で　　と言うか百パーセント近く抱きしめて寝るのよね。

私にしたら、たまったものじゃないわ。  
人肌はあったかいから落ち着くし安心するって言うけど、環境にもよると思うのよ、うん。

だから、一緒に寝ようとしたジルベールと攻防戦を繰り広げ、奇的に勝利を勝ち取った私は、久方ぶりに一人ゆっくり寝れることになった。

……はずなのだけど、あれ？

「何故、居るの……」

深夜、ちよつと暑苦しいような……って思って目を開けたらジルベールに何故か抱きしめられて寝ていた。

ジルベールの侵入防止するために鍵は、ちゃんとかけて寝たよ、ね。

「魔法で開けた」

何か問題あるか？と、同じく起きたジルベールに言われた。

……ああ、魔法かあ。便利ねえ……って違うつー！！

いやいや、便利だけでも狡くない？約束も違うつような……。

私の内心の言葉を察したのか、心外だと言わんばかりに、ややムツとしながら言つジルベール。

「ルウとの約束は守ったぞ」

「何処が！？」

「日付が変わっただろ」

「……………はっ。」

日付？

……確かに火鳥月ひのとりのつきの二十日になってる。  
はて？私はジルベールになんと言う約束をしたんだっけ？

「今日 いや、もう昨日か は、一人で寝たいだけだろ  
うが」

「……………言った、かも」

言ったっけ？

うーんと考える私の脳裏に、攻防戦の時の状況が蘇る。

『今日は一人で寝たいのっ！！』

……………言ったわ、はははは。

だったらジルベールのしてること問題なし？

何で、今夜って言わなかったのよ私は！  
それが朝まで一人で寝たいとか…。

ガツクリ頂垂れた私に、  
「解決だな。よし寝るぞ」

と、ジルベールは寝転がり、当然の如く抱きしめてきた。

「だ〜か〜ら〜暑いんだってば！」

「ルウは我が儘だな」

「我が儘じゃないよ！」

「はあ……」

私の言葉にやれやれと溜め息をつくジルベール。  
溜め息つきたいのは私もよと言いかけたけど、言葉にはならなかった。

「ひゃっ……ジルベール……な、なにしてっ……」

するりと夜着の上から、意図を持って撫で上げられ、びくっと震える。

「よつは暑いから寝れないんだろ。やってりゃ寝れんだろ」

「余計寝れるわけないし！」

じたばた暴れようとする私を押さえ込み、ジルベールは薄手の夜着の裾から手を侵入させて来た。

「ちよっ……んっ、んんっ……」

おまけに私の抗議はキスに塞がれ、意味をなさなくなり……与えられる愛撫に陥落してしまうのに時間はかからなかった。

覚えているのは、

「ルウ、愛してる」

と、抱きながら情欲に染まった紫の瞳を向けて囁くジルベールの声と互いの熱い息遣い。

結局、寝れるには寝れたけど（気絶とも言っ）明け方近くだった。

もうやだ、だから一人で寝たかったのに！。泣きたい。

ジルベールに言ったら、別の意味で泣かしてくれそうだから言わないけど……。

80

朝。

昨日よりかは、ややラフっぽい格好の軍服を着てジルベールは軍部へと赴きました。

私？

あはは…ベッドから動けません。お留守番よ。腰がね……痛いの。最近ジルベールは鬼畜かと思えてならない。それか絶倫？

たいして意味変わんない？まあいいじゃない。

夜のジルベールは、そんな感じってことよ。

そもそも民間人が、軍関係の場所に猫姿とは言え、頻繁に出入りし

たらダメだと思う。

ほら、重要機密とかありそうじゃない？って言うかあるよね絶対に。帝都アリスライラの軍本部では、パトリシア陛下の口利きか何かで特別に出入り出来たとは言っても、ここはファイラントウルだし同じことが通用するとは言い難い。つてな訳で、ファイラントウルに居る間は私ずっとお留守番で構わない。

そう、思ったんだけど……困った。  
現在、お昼を過ぎた頃。

その頃には、漸くベッドから降りれたのは良い。問題は、することがなくて暇。

さて、どうしようか。

猫になってもして寝る？

「うーん……サマティに会いに行くとかは……」

つてあの森この近くだったけ？

帝都より少し離れた場所だったはず……。

ファイラントウルは、どっちかと言うと辺境の地にあるらしく、帝都からも遠い。

なんか余計、遠くなってない？

サマティに会うのが無理じゃん。

テレポートですぐ着く？  
だから魔法使えませんかっば。

読書は？

こちらでも文字読めませんから無理ですね。

一体、なにをして時間を潰せと言うのか。

「散歩とか？」

それしか無さげ…。

ちらりと窓を見、次いで自分の服装を見た。

今日の私は紫のアラビアンっぽい衣服に身を包んでいた。

何でもこの地方の民族衣装とからしいけど。

アラビアンっぽいって言うのは、こつちの世界にはそついう私が居た世界の国の名前がないから。

でも見れば見るほどアラビアン衣装みたい…。

「ちょっとだけなら……でも暑そう……暑いのは遠慮したい……」

だったら屋敷の中を探検とか？

もうそれしかなさそう…。

うんと頷くと、猫の姿になり部屋から出ていく。

それから数時間後。

「ルウ？何処だ？」

ジルベールが帰宅した時、私の姿は何故か屋敷になかったのです。

何故、違う国にいるのでしょうか。

「おう、ルウ。うめえか？」

「はあ…美味しいです」

何がどうなってるのと、問いたい。

まずは状況確認からするべきだろうか？

手に持ってるのは、あったかい野菜がたくさん入ったスープらしきもの。

これは、声をかけた目の前の男が差し出したものだ。

今の私はアラビアンな服の上に、借りた毛皮のコートと毛布を一枚羽織った状態で、暖炉の近くに座っている。

一体、何が起きたのかさっぱりなのだけどここはヴィシライーフア帝国のファイラントウルではないらしい。いや、まあ何となくそんな感じはしてた。だってそうでしょう？

猫の姿になつて屋敷内を散歩していたら、いきなり現れた見知らぬ女の人に何か色々と言われたあと魔法で攻撃され意識を失い、気が付いた時には獣型の猫ではなく人サイズに戻っており、暑かったはずなのにめちやくちや寒い場所に放置されていた。

右も左も分からない場所で困っていたら、助けてくれたのだ。目の前の男が。

彼は所謂獣人族と呼ばれる虎族の男らしい。

頭からぴよこりと存在する虎耳とお尻の辺りからゆらゆら揺れる虎の尻尾。

短く整えられた金色の髪に、爛々と輝く紅い瞳。

がっちりとした体躯には、所々肌に古傷とは言えども武器で傷つけられただろつ傷がある。

もしかしたら現役の軍人さんか、退役した軍関係者だった人かもしれない。

これで美形だったら、女性にモテたかもしれないのと残念に思う。そう、彼は197cmの長身を持ち尚且つ顔が強面なのである。

私も最初怖すぎて泣きそうになったが、何とか慣れてきた。

虎族の男　　名をロイク・ラフレールと言っらしい。

外見年齢でみれば30代後半ぱいけど、この世界は長寿だからイコール実年齢とは限らない。

でも落ち着き払った雰囲気からして、長く生きてるような気もする

確実にそうだろう。

それはさておき、ロイクさんから聞いた話では、ここは大陸の北に位置するグランジェリカ大帝国と言う魔術に秀でた魔術師の国らしい。

首都はリュシエール。

この国は、獣人も人間も差別なく暮らせる数少ない国らしく、多くの獣人がこの国にも住んでいるとか。

だけど、残念ながらヴィシライーフア帝国とこの国は国交は皆無と  
言って良いくらいない。

ええ、限りなくゼロに近いんです。

むしろ帰れるかと聞いても、色好い返事は難しいだろう。

何故ならば、ヴィシライーファ帝国が存在するのは大陸の南西。

現在大陸の東西に別れて大戦争中。

ああ…何か前にメイドさん達から聞いた話に出てきたね。

グランジェリカ大公国は、中立国となっているらしいが、そうは言  
つてられない状況になってきているんだって。

先日、グランジェリカ大公国の同盟国のひとつが、ティルテアナ―  
ゼ教信仰国の中でも軍事国家と名高いノルデセラム帝国に敗北。属  
国となった。

これはロイクさん情報。

「んで、ルウ。お前帰りたいたんだよな？」

「……………あ…はい」

考えこんでたから、反応が遅れたが頷いた。

グランジェリカ大公国も悪くはないが、私はヴィシライーファ帝国  
に帰らなきゃならない。ジルベールのもとへ。

……………違う。帰らなきゃならないんじゃない。

私はジルベールのもとへ帰りたいの。

何故って…

よく分からないけれど、心が求めてる気がするの。  
彼に会いたいと、強く。

きっと今の私は、ジルベールに少なからず惹かれ始めてる。  
だからでしょう。

他の誰でもない、ジルベールを求めるのは。

「結論を言えば、可能性はゼロではない」

「本当ですか？」

ロイクさんには、私がヴィシライーフア帝国に居たことを話してある。

ジルベールのもとへ帰りたいことも。

「ああ、可能だが…難しいな」

そう言うと、私の隣にいつの間にか座っていたロイクさんは腕を組み  
み難しい顔をした。

眉間に皺を寄せているからか、一層凄みを増してますよ、ロイクさん。  
ん。

ここに他に人が居たら、逃げ出してるかもしれない。

「フィリドールの森を抜け、ルクールドラメル王国のアスカリイ  
ードに入ればヴィシライーフア帝国に行くのも難しくはないだろ  
う。」

ルクールドラメール王国はユリナファイ連合国側だし、ヴィシライー  
ファ帝国とも同盟関係にあるからな」

「じゃあ、そのフィリドールの森へ行けば……」

帰れるんじゃない……と言いかけたけど、難しいと言ったロイクさんの言  
葉を思い出す。

あれ？

何かそんなに難しく思えないんだけど？

あ、あれか。距離が半端なく遠いとか。  
違います？

そんな願いをこめて、ロイクさんを見るけど彼はいやと首を横に振  
った。

うん、違うらしいね。

「フィリドールの森があるのは、サルティーヌ王国だ」

「サルティーヌ王国？」

「話しただろう。グランジェリカの同盟国のひとつが、ノルデセラ  
ムの属国になったと」

「……もしかして」

それ、サルティーヌって国だったんですか!?

でもって、帰るにはフィリドールの森を絶対に抜けなきゃルクール  
ドラメール王国方面へは行けないとか言っんですかね？

「そのもしかしてだな。他のルートは封鎖されていてノルデセラム  
帝国軍の監視下にある。」

フィリドールの森もいつ監視下に置かれるか分からない」

だから行動に移すなら早めにしなければ、帰れなくなる。って言い  
たいんですよね。

ああ…私には戦争関係ないって思ったのに何か一気に身近に感じ  
るようになった気がします。

でも他に手だてがないのなら、怖いけれど迷ってはられない。

「……帰ります」

「そうか。アスカリードまでは俺が責任をもって送ってやるっ」

「良いんですか？」

「構わん。ルウ一人だと、敵軍にすぐに捕まりそうだからな」

「ありがとっございます。お世話になります」

反論できません。

確かに、ロイクさんの言うことが正しいですもの。

「出発はまた後日だな。それまでは休め。

ああ、ルウの服が届いたようだ」

ロイクさんの言葉に、入り口を見やれば服を持った女性が立っていたがロイクさんと目があえば彼女はびくつと身体を揺らす。

怯えさすのもかわいそうだけど、ロイクさんは彼女のあからさまな態度に若干傷付いたような顔をした。

私は慌てて入り口まで行き、彼女から服を受け取りお礼を言うとそくさと彼女は逃げて行く。

「ルウ、俺は少し席を外そう。その間に着替える」

「……はい」

部屋から出ていく背中が、何処と無く寂しげで。だけど、私にはどつすることもできなかった。

ジルベールside

「ルウ！ルウ！」

「旦那様、落ち着いて下さい」

「ルウが居ないんだぞ。落ち着いてられるか」

手当たり次第、屋敷を搜索。それに並行してファイラントウルも搜索したが、ルウの姿は依然として見つからなかった。

今は、ファイラントウルにあるフォートリエ邸の屋敷の一室に、落ち着きなくいるジルベールを執事である男性が宥めている。

「アルベール殿に協力を要請致しましょう」

「ノエルにか？……そうだな」

魔法使いであるノエル・ユテラ・アルベール。  
人の手を割いて搜索しても見つけれないとなれば、もう彼に頼るしかないだろう。

「早速、連絡を入れよう」

「では、私は一旦仕事に戻ります」

「ああ、悪いな」

「いえ」

そうやって、彼はジルベールに礼をすると部屋を退出していった。ジルベールは、ノエルに連絡すべく抽斗から羊皮紙とインクと羽根ペンを取りだし机に置くと椅子に座るとペンを持ち認める。書きながらも思つのは、ルウのこと。

「サルティーヌやノルデセラムに居なければ良いんだかな…」

ヴィシライーフア帝国内に居るならば、まだ良い。

同じ国内ならば、テレポートが使えるが他国ともなれば一旦その国に入国してからでないとテレポートが使えないのだ。

便利そうに見えて、面倒なところもあるのが魔法である。

数日後、手紙を受け取ったノエルがファイラントウルにやって来て、魔法で探索を行った結果はジルベールを驚かせるものであった。

そして、サルティーヌ王国がノルデセラム帝国の属国になって二週間後。

戦局は一転。ノルデセラム帝国率いるティルテアナーゼ教信仰国軍側に傾き、ヴィシライーフア帝国もまたユリナフィ連合国軍側の一国として戦に身を投じる事となる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3365t/>

---

大将と猫娘

2011年12月20日01時55分発行